［史料紹介］

関藩年譜（三）

中村正己

貞享四　丁卯

正月二日　為年始御祝儀、御上京御所司代土屋相模守政直江御太刀、馬代御持参、戌刻御使以下傚之

同月十二日　富田外記定幸宅江被為入

同月十三日　木村正右衛門正純宅へ被為入

同月十八日　加藤求馬之助御宅へ被為入

正月廿七日　吉良上野介様為上使、御上京ニ付、為伺御機嫌御出京

三月廿三日　今度法花宗之義ニ付、公義御検議（ママ（建カ））有之ニ付、御改宗可然旨ニ付、本妙寺へ同断

○四月晦日　町同心廿人にて不足ニ付五人増、合計廿五人

○五月六日　亀山領王子村従之稲荷本社鳥居石段御建立

五月三日　當四月廿八日御即位東山院ニ付、御太刀、馬代銀十枚、本院、新院御所江銀十枚、中宮へ同十枚御進献之、御使者三浦舎人直

同卅一ケ條御年譜ハ此通御記録ニハ元禄元年三月日ト有之

五月十五日　為御参府御発駕御供富田外記

同月十六日　夜江戸江御着

六月九日　御参勤之御礼線百把（ママ（香）脱カ）、金馬代御内献上、御文庫御硯筥

○同月廿四日　當年より松平團之助様へ金卅両ツッ御合力

七月十六日　以来御持鑓二本、前之通為御持候、阿部豊後守様より御伝達　同十九日より為御持

八月八日　西丸火之御番被蒙　仰

○五月四日　三浦舎人　年寄役被　仰付

元禄元　戊辰

○正月九日　水野越前守様へ清雲院様御願ニ付、当年より金五十両ツッ御合力被　進候旨、卯十二月廿四日連状ニ申来

「頭註」「利房筆記云　此度乗藤新八不受不施宗ニ付、三宅嶋へ流罪被仰付、依之不受不施ニ無之衆中も改宗被申、大久保加賀守殿同佐渡守殿林信濃守殿抔も改宗ニ付、此方様ニ而も御改可然思召仰付」

二月八日　御改宗ニ付、天台宗上野末下谷金光山大覚寺養玉院御頼銀三枚被遣之

同月十九日　御位牌御安置

○五月十八日　以来養玉院へ米廿俵ツッ可被差遣旨被　仰出

六月十日　御年譜ニハ五月トアリ　御暇　例品御拝領以下

傚之
同月廿二日　御発駕　七月六日末下刻御城着
同月廿八日　亀山外郭御城浚御伺之通
○十二月十八日　御在所破損、手代上下御免
○同月「虫損」六日　御先手弓之者、弓金壱分ツヽ被下
○五月十二日　伊藤弥太夫、依願御役御免
○六月二日　富田善右衛門、依願隠居

元禄二　己巳
正月十六日　為年始御祝儀御出京
同月廿七日　吉良上野介様御上京ニ付日
閏正月廿九日　富千代様御逝去
「頭註」三月朔日より御先手、足軽共拾五俵弐人扶持ニ御直御城御普請可相勤旨被仰付
五月十八日　卯上刻御発駕、同廿九日御着府
六月九日　御参勤之御礼　例品御献上、以下傚之
○同月十三日　御持筒組二口被仰付、一組へ金三両ツヽ被　下
十二月廿七日　主水様御儀、平九郎様御養子ニ御願之通

元禄三　庚午
正月卅日　久世弥右門様、小日向御邸へ御引取
三月十一日　公家衆芝御参詣ニ付御固
七月十二日　御暇
八月朔日　御在着　御用向ニハ八月二日トアリ
同月十五日　松平團之助様五百俵御拝領
○九月三日　矢代社矢田八幡並同所桑山大明神両社修復ニ付、銀拾枚御寄付奥様より同三枚
○八月廿日　瀧川頼母様依願御役御免
「頭註」御普請ニハ五百石

元禄四　辛未
五月十九日　亀山御発駕、六月朔日御参府。
六月十一日　御参勤之御礼御内献上御几ニ
「頭註」御相番青山下野守殿
七月廿七日　三ノ丸火之御番
八月十日　殿様御瘧　閏八月十日御快気
○九月十四日　御徒士六月晦日迄ハ一年之御切米不残被下筈、七月以後ハ切米之内三両被下筈、召抱之節右定之通　被仰出
十月朔日　赤毛之犬壱疋御献上。
○同月十七日　加藤求馬之助病死

元禄五　壬申
二月廿一日　公方様御講釈御拝聞、　畢而　殿様ニモ御講釈御勤
四月五日　廿日　日光御名代松平対馬守様御代被蒙　仰
六月廿八日　御暇、　七月九日御発駕
七月廿日　卯上刻御在着

元禄六　癸酉
正月十日　御上京、丑中刻御発駕、戌中刻御帰
○二月廿八日　亀山町年寄村上六之丞所持之金屏風被召上、銀十枚六之丞江被成下
○三月廿五日　河原田作兵衛養子惣助不縁ニ付、山口小一右衛門方へ養戻候節、双方より支配方ヲ以願書差出達　御聴之上離縁
五月十九日　亀山御発駕　六月朔日御着府
六月六日　御参府御礼
同月九日　二ノ丸火之御番
「頭註」御相番三浦壱岐守様
○七月朔日　元〆但是迄三枚一口之処、以来十五俵一口ニ御直
七月四日　於本所御下邸御拝領三千五百坪

「頭註」利房筆記に本所三ツ目之先ト有之

元禄七　甲戌

三月廿五日　戸田山城守様忠昌御宅江、公方様被為成候ニ付御勝手江殿様御越於御前大学湯盤銘御講釈御勤

六月十日　御暇　廿一日御発駕

同月十五日　於勝様、御鉄漿始、酒井右京亮様奥様より御道具被進上

七月二日　未下刻御在着

○十二月二日　御不勝手ニ付、御持筒組ニ而壱人御先手ニ而弐人、町同心五人御省略中御越、於御対面所頭へ申渡

○同月十二日　諸席当番書并会所寄合出坐之面々名前書付御目付相改、晦日御差上候様被　仰出

十二月六日　御年譜ニハ七日　お勝様御儀、松平周防守様御嫡采女正様江御縁組、御願通水野越前守様へ御達

「頭註」七日ニ相違無之、阿部豊後守様正武より真女院様へ被遊候御書ニ有之

元禄八　乙亥

正月十日　御上京

○四月十四日　国分村銅山出来ニ付、松前伊豆守様へ御伺ニ御使者中田与右衛門出京、不苦候間為堀候様差図、尤追々繁昌銅も出候ハハ、御所司小笠原佐渡守様より江戸御伺可有候旨

四月廿九日　吉良上野介様御上京ニ付、　同丑中刻御出　丙ノ刻御帰

五月十八日　亀山御発駕、六月二日御着府、未ノ上刻

六月十日　御参府御礼

同月十九日　西丸火之御番江御奉書被蒙仰

「頭註」　御相番松平丹後守様

○四月十五日於亀山亀井清左衛門御中小性支配被仰付、於御料理之間支配引渡

六月廿一日　唐木御見臺御献上、今朝阿部豊後守様迄被遣

同月十六日　松平周防守様御惣容様御招

九月四日　戸田山城守様御亭江、公方様被為成、殿様為御取持御越、於　御前論語先進篇御講釈御勤、畢而芦州御仕舞御勤

○同月廿八日　御不勝手ニ付、御家中之面々物成之内差上度旨奉願候ニ付、達御聴候処、御家中致困窮候段被為聞召候之間、此度者御借用被遊間敷、依之拾人へ被下置候差米当亥暮より卯暮迄五ケ年之間差上候様被　仰出、於御対面所申渡、右之趣於江府廿二日申渡

元禄九　丙子

○二月廿七日　足軽ハのし、羽織之紋吉文字ニ候間、直候様被　仰出則役所到来本〆江申渡

六月十四日　御暇、廿三日御発駕、卯中刻雨天

七月四日　申ノ刻在着

十月廿三日　夕七時中根長太夫次當阿部豊後守御宅江被呼、御奉書御渡、同廿六日亀山江到着、今度小出久千代様御幼少ニ而御死去。御遺跡無之、但州出石被御召上候ニ付御請取、並三万五千石之御軍役ニ而御在番被蒙　仰御受使者堀田丹右衛門

十一月廿九日　内藤又兵衛為斥候出立

十二月二日　三浦舎人時直御先備人数召連

同月三日　卯上刻、殿様但州出石江御出馬、富田外記定常番頭下河辺新七行充　亀井清左衛門満矩　加藤平七盛正惣騎馬四十一騎、御人数都合弐千人餘

同月五日　出石江御城着、同六日御城受取相済、引渡御目付永田弥左衛門様重種　西尾多兵衛様政種　御勘定組頭

岩出瀬兵衛様　御代官小野浅之丞殿高保　石原新左衛門
正氏御越、出石衆仕置役堀民部・板坂三郎左衛門
「頭註」△御勘定能勢権兵衛頼重荻原新五兵衛左房も罷越
同月九日　出石御駕籠、同十二日亀山江御帰出石御城江者
三浦舎人時直亀井清左衛門満矩其外御人数三百人為在番被差
置

元禄十　丁丑
正月九日　例之通御出京
同月廿七日　吉良上野介様御上京ニ付、例御出京可成処、御
不快ニ付、御使河合源五右衛門
二月廿五日　女中　出産緑之助殿御出生
二月廿八日　今度　女御入内ニ付、上使本多中務大輔忠国様、
品川豊前守様御上京ニ付御出京
○閏二月二日　水野越前守様御加増御拝領ニ付、以来御合力金相止
閏二月五日　丹波国絵図御松木伊予守様与御両人被蒙　仰
「頭註」江戸町御用留四日トアリ
四月晦日　但州出石御城松平伊賀守様忠昌御拝領ニ付、御
同人様衆菅谷隼人江引渡、御目付井上内記正方様・馬場三郎
右衛門様尚恒
五月二日　三浦舎人始在番之面々罷帰
同月十一日　去六日出、四日切飛脚到来
殿様御用之義有之ニ付、六月中旬御参府被成候様御奉書到来
御受使者吉川庄太夫、同月十六日亀山御発駕、廿七日御着府
申中刻
「頭註」御奉書中根兵太夫へ御渡被成候也　戸田山城守様ニ而
六月朔日　御参府御礼
同月五日　松平和泉守様より於勝様へ御結納之御使岡田織
部様持参富田外記受取之和泉守様妥女様御事
六月十日　於　御坐之間三州吉田江御所替被蒙　仰同廿八
日右御礼例之通被献
○同月卅日　原数右衛門・富田九助・館田宮新規御用人役被仰付、
詰処御用部屋、尤加判者無之、日々出仕非番八九半時より、泊番
壱人充可相抱勤旨　被仰出去廿二日　被被仰付候旨申来
八月廿七日　三州吉田御城地小笠原佐渡守長重様衆多賀長
兵衛・小川源左衛門より富田外記定常受取之、御渡御目付稲
葉大学正綱様　天野佐左衛門雄正様　万年三左衛門頼官
太田弥太夫重元
九月十三日　亀山御城地三浦舎人時直・井上大和守様衆井上
将監・田口宇右衛門江引渡、御目付町野酒之丞幸重様・野一
色頼母義政様、今度亀山へ新規残置候武器・鉄砲廿挺但貸具
共、弓拾張、靭拾但根矢十一本ツッ入、長柄弐十本
十月朔日　吉田御領地之御朱印御頂戴、以来年中御献上二付、
串蝋六月干鰺寒中、生干鯛十一月九日御年譜ニハ十一日甲府
様江御成共奉絵云
「頭註」総云十月七日（虫損）御引渡之御目付両人御招、代金三枚之御刀
一腰ツッ、被遊大学三枚　佐左衛門二枚

元禄十一　戊寅
○四月朔日　木村正右衛門依願御役御免
○二月七日　先手被減候御先手組、以前之通弐人ツッ召抱候様申
渡
二月十八日　今度三州岩津信光明寺御修復ニ付御奉行可差
出旨被蒙　仰
三月十五日　公家衆上野御参詣御固
「頭註」四月廿三日　八重姫君様御入輿ニ付、綿百挽御献上
六月十五日　御暇、例品御拝領、廿六日御発駕
七月三日　辰下刻御城着、御供富田九助実證、白須賀駅迄為

御迎、御旗竿三本御鉄砲廿挺　御弓拾張　御長柄拾本、野上平右衛門　下村吉太夫　丹羽十郎右衛門罷越
同月五日　辰刻御城内三社江御参詣、銀・馬代奉納
○同月六日　以来吉田立帰之足軽御手当者壱分之外わらじ銭不被下、馬八十人、壱疋但在番八五人、壱疋相定
十月十六日　信光明寺御修復出来、友田弥一右衛門進佳、八木太兵衛成正下奉行相務△翌卯年成就ト有之
以上の関藩年譜は、藩主久世重之が貞享四年（一六八七）一月より元禄十年（一六九七）六月迄、丹波国桑田郡亀山（京都府亀岡市）の亀山藩に在職中並びに以降三河国吉田藩に移封する迄の記録である

（なかむら　まさみ　当館展示協力員）

『研究報告』第19号　正誤表

ページ	行　等	誤	正
19	9行	元禄十年（一六九七）六月迄、	元禄十一年（一六九八）十月迄、
19	10行～11行	並びに以降三河国吉田藩に移封する迄	並びに三河国吉田藩に移封する頃